

政治学概論Ⅱ

(13) アイデンティティと共生社会の政治

イデオロギーからアイデンティティへ

- 冷戦期 = 自由民主主義体制 VS 社会主義体制 （黄金の30年）
イデオロギー政治による競合（国民国家）の時代
- 冷戦後 = イデオロギー統合の緩和（グローバル・ボーダーレス）
- = 反作用としてのナショナリズムとアイデンティティ
- 民族・宗教・文化・ジェンダーへの意識 = 人権と平等
多文化共生（と分裂）アイデンティティの主張
新たに世界的な政治課題として向き合う必要性

女性参政権の歴史

- 男性が独占支配してきた政治の世界
- 女子教育の普及 = 自由と平等、人権思想の普及 国民国家
- ⇒ 女性の政治参加を求める考え方（19世紀後半ころ）

徐々に女性参政権（第一次世界大戦が契機）←女子労働の普及
イギリス・フランス・アメリカなど（20世紀初頭から前半）

- 第二次世界大戦後は女性参政権の確立が世界的な潮流に
日本においては敗戦直後に1946年4月総選挙から
（ただし女性参加が政治に大きな変化をもたらしたわけではない）

世界・日本のジェンダー平等と政治

- 女性解放運動＝1960年代「先進国」から世界へ
- ⇒女性の自己決定権の尊重（真の男女平等）結婚や出産など
←経済成長に伴う教育と生活水準の向上、女性労働の普及
※「福祉国家」での労働環境の向上
- 1975年、国連「国際女性年」～80年代 フェミニズム運動
- 家父長的な支配への対抗、女性の社会参加・地位向上を求める
- 日本＝1985年 男女雇用機会均等法の制定 女性差別撤廃条約の承認、批准など。「専業主婦（子ども2人）世帯」から
「共働き世帯」への移行が徐々に

マイノリティの尊重と権利保障

- フェミニズム運動⇒性的マイノリティ（LGBTQ）への影響
 - 権利擁護、自己決定権の尊重⇒「カミングアウト」
 - 21世紀にかけて「同性婚」ほか、法的な権利保障を求める運動
-
- 女性の政治参加「機会の平等」⇒「結果の平等」
 - 意思決定層（権力を持つ人間）に女性が入ることが必要
 - 「クォータ制」の推進など
 - ※日本＝政治分野（議員や閣僚）女性比率の低さが問題に
罰則付きの数値目標で推進すべきか？

共生社会とアイデンティティ政治

- マイノリティを尊重する・多文化共生・・・実現の難しさ
 - 21世紀、アイデンティティ・ポリティクスの時代へ
 - ←これに対する反発も（伝統的価値・生活習慣との衝突）
 - 「ポリティカル・コレクトネス」の強制に対する反感
-
- 過度なアイデンティティの強調⇒合意形成の難しさ
 - 「政治的分断」⇒専制型・権威主義的な政治への志向
 - 合意できる人権を前提に「妥協と漸進」をはかる政治の必要性
（民主主義は強制してもうまく機能しない）

考えてみよう

- ジェンダー平等のために「クォータ制度」を導入することについて、どの分野でどのくらい進めるのが適当だと思いますか。
できるだけ具体的に考えてみましょう